

ジュエル・ピンク竜絡作戦の最終報告

作戦は成功。目標時間は3時間ほどオーバーしたが御船ノノの催眠洗脳は完了して、オプト・ムーンの忠実な構成員にすることができた。また、御船ノノの母親も事務能力が高く、使い捨てにするには人員も足らないので構成員として組み込むことにする。

御船ノノの自宅とその上の第3支部は、採りが入る前にすべての機材を撤収して新たに第4支部と第5支部を設置する予定だ。第4、第5はこれからジユエル・スターズ本部攻略の計画に組み込む。

なお、御船ノノは開発局から送られてきた植物型の改造因子..アウラウネに適合したので怪人名..ブラック・フォビュラスと変更しておく。

変身時は肌が緑色。衣装は元の魔法少女のピンクの色調と同系統のものだが、それが黒をメインに配色され直されて、胸やアソコを強調する見た目だけでも十分に男性を惑わせるデザインとなっている。

魔法の力は怪人改造の影響で植物麻薬の体内生成、植物の瞬間変異、光や香りでの催淫能力と変化している。また、自身の体から出る体液を媒体として、自分の因子と意思を体内に入れた相手に強制的に移すことが可能。これを応用すると、疑似的な子怪人を作り出すことも可能な能力である。*御船ノノの母親で確認済み。

魔法の宝石は体内に埋め込むことで、今までの弱点を解消して、変身しないでもある程度の能力の行使も可能にしている。

ブラック・フォビュラスは今後、ジユエル・スターズ本部攻略の諜報員として活動する予定。

「藤村さーん、お茶入れたんでちょっと休憩しちやいましょうよ」

あれから、1週間。いまだに私は敵であるジュエル・スターズの本拠地に出入りしている。もっと、A様のお傍にいたいんだけど、重要な任務を任せられちやつたから仕方ないね。早く終わらせて帰りたいな。

任務内容は、オプト・ムーンのスペイとして潜入して、いろいろと裏工作をしちやう」と。例えば、こんな感じ。

「これ、親戚からもらつたんですが疲れた時に凄い効く良いお茶なんですよ」「おい、甘い匂いが強いけどこれは確かにいいね。眠気が吹き飛ぶよ」

「んふふふ、それだけじやないんですよ」

「何勿体つけちやつて、る、の……」

私、特製のお茶を飲んだ技術担当の藤村さん（23歳）は急に意識を失つたように固まちやつた。

眠つてしまつてといつた状態じゃなく、まるで催眠術にかかつたようにその場で焦点を失い文字通り固まつてしまつています。

「すごいでしょー。今回は特製で即、催眠状態になるお茶なんですよ」

固まつてしまつた藤村さんの耳元でいたずらを自慢するようにささやく。めんべくさいんでここで襲つちやいたいけど、本部だと監視カメラがうるさいからね。ここはぎりぎり力メラの死角になつていてこうやつてちょっと催眠をかけるだけならバレない場所なんだ。

『今日の夜、5つ先の駅のそばにある〇〇アパートの203号室に来てくださいね』

周囲に声が漏れないように小声でそつとささやいて藤村さんの頬を突つつく。そのアパートはもちろん、オプト・ムーンの第4支部（仮）だ。

「つは？！ あれ、何だつたつけ？？」

「もう、藤村さんつたらあまりにもお茶がおいしいからつて意識飛んでたんじやないですか？」

「え、いやーそれは……うーんやつぱり疲れてるのかなー？」

私はよつと、掛け声を出して椅子から立ち上がる。

「それじやあ、約束ですかねー」

「うん、わかった。後でねー……ん？」

オプト・ムーンの活動は1週間前の事件の後から鳴りを潜めている。あれでほんどの戦力はつぶしたという意見が大多数だ。あとは、本拠地を割り出して跡形もなくつぶす方向で話は進んでいる。

すでに、内部に毒々しいとげが刺さっているとも知らずに動いているみんなは割と滑稽で、たまに吹き出しそうになつちやうけど我慢我慢。基地内は敵の本拠地の割り出しに全力を注いでいて、定時以降の隊員や事務員の動向にはほとんど注意を払っていないのは確認済み。

あー、ごめんね皆、これからジユエル・スターズをめちゃくちゃにする準備しちやうけど。気づけないよね。あはつ、すつーいドキドキしちやう。

「ひや、あ、ええ？！ ノノちゃん……や、ん、力が」
「ふふふ、お代わりいっぱいありますからどんどんどうぞ。ちゅふ」

ここは駅からちよつと離れたアパートの一室。新しく作つたオプト・ムーンの第4支部（仮）。時間は20時過ぎでやつと藤村さんが来たので招き入れてそのまま襲つちやつてる最中です。

「ん、こく、んんん、ん、こく、ん、ふはあ！？ 甘い。ん、いやそんな……ん」

「べる。どうですか私の唾液の味。甘いですよね。昼間のお茶の原料なんですよ？」

あははは、藤村さんまだちよつと正気が残つてるみたいで目を白黒させてる。でも、大丈夫。もうちょっとあの特性お茶の原液の私のよだれを飲み込めば、なーんにもわからなくなつちやいますから。ちゅふ。

うん、いい感じにとろけてきた。ああ、これはまずい。私、凄く興奮しちやつてる。この催眠洗脳しているときのわけわからなくなつて惚けてる顔、正義の味方やつてみんなを助けた時に貰つた笑顔の何倍も好き。

「藤村さん、そんなとろけた顔されちゃつたら、私我慢できなくなつちやいます」

あと一押しですねー。もういいか、変身しちやおう。もちろん、怪人の姿に。そつちの方が効きもいいし。

本性を現してしばらく藤村さんの唇の感触を楽しむ。

「あは、藤村さんも準備できちやいましたね。あのお茶というか私の体液つて催淫作用があつて、飲み続けると私の言うこと疑問も持たずに全部受け入れちやうんですよ」
どんどん受け入れちやつて下さいねー。お、準備オッケーかな？ 食べごろかな？

「う、あ……」

「それじゃあ、いただきますね。大丈夫。気持ちいいだけで生まれ変わったような気分になりますよ」

「うふ、ん、つと。私は今は淫紋に変わっちゃった。ペタルジュエルに力を注いで、子を作るための準備を始めた。」

魔法少女のころの純粹できれいな光とは真逆で淫靡で怪しい輝きが淫紋の周囲にあふれてクリトリスがにゅっとおしべに変化する。

「ん、はふう……凄いでしょ、これ。お母さんに試してみたんですが、とっても喜んでくれて。きっと、藤村さんも気に入ってくれると思います」

おしべ、本来ならクリトリスがある部分に長さ20cm。太さは大きめのバナナぐらいの緑の物体で、まあ、色が肌色ならまんまおチンポだね。

「……ん……あ……」

「藤村さんも準備できたみたいですね、それじゃあいただきまーす」

この状態でも一応、意識はあるけど何されても何を見ても右から左で全く理解できなくなる。私としては人形で遊んでいるみたいで、あまり好きではないけど子を作る行為はやっぱり気持ちよくなつちやうね。

「ん、あは。藤村さんの中、とろつとろで入れただけで出しそうですよ」

お母さんと違つてなんかつぶつぶがいっぱいで凄い！？ 名器ってやつ？？ これならすぐにいっぱい出しちゃいそう。

「ん、もうすぐ、あ、ん、んんん。ふああ、ああ、受け止めてください！」

どぴゅ、という音と同時に藤村さんの中に白濁した蜜を吐き出す。ぼたぼたと粘度の高い液体が膣からあふれる音がしている。

「はうん、やつぱり、凄いよう。これ、やめられない……」

「ひやう！？ え、あれ！？？」

あ、意識が戻つた。うーん、今まで3人ほど犯してきたけどとりあえずは失敗したことなかつたし、藤村さんにもきちんと入つているかな？

「あ、藤村さん気づきました？」

「え、あ、ああうん気づきました。よ？」

ふむ、ここまではいつも通りかな。怪人になつた私を見ても当たり前のようにしていいるし、常識の改変はうまくいったみたい。

「えーと、藤村さんちょっと質問いいでしようか？」

「う、うんいいよ」

「藤村さんはノノの何でしようか？」

「奴隸だね。ん？ あれ、えーとつうん、私はノノちゃんの奴隸。なんでだろ当然のことなのに何か引っかかるね？？ どーもおかしくないのにね？」

「あ、大丈夫、大丈夫。もうちょっと出したり入れたりしたらなれますから」

「ええ、うーん。ノノちゃんがそういうならそうかー」

うん、記憶は更新されているみたい。まだちょっと前のものが残ってるけどそれはいつものことだし問題ないね。

「それじゃあ、今度は藤村さんの番ですね」

「え？」

「最初はですね。こう、お腹の下あたりに力を込めて出るってやつてみてください」

「うーん、出る出る出る……あ、ひや！？ あ、アソコが……ん、ひやああああ！？」

ぴょんという音が出そうな感じで藤村さんのクリトリスがエツチなおしへに変化する。

「お、無事生えちゃいましたね」

「ひや、ちよ、ノノちゃん。敏感、出たばかりで敏感だから加えないでえ！？」

「ちゅ、んーん、初物は格別な味がします」

「あ、あああ、あ、あああああ、出る。何か出ちやう！？」

「思いつきり出しちゃつてください。今までの常識とか倫理とかいろんなものもきれいになるのでどびやつと！」

藤村さん中も名器だつたけどこつちもすごいな。初射精なのでどろどろというよりもうところてんのような固形物をぶつぴゅふぴゅつと勢いよく出し続けている。感じすぎて痙攣しちゃつてるよ。ちゅる、うん、味も問題ないね。どんどん出していつちやおー

「あはは、初めてだからすつごい出ちやいますね。とつてもおいしい蜜ですよ藤村さん。それじやあ、私からもお返しを、いっぱい濃いのを注いであげますね」

「ひや、凄い！？ 出る、ああ、ダメ、あ、気持ちよすぎい！？」

「おめでとうございます。これで藤村さんも仲間ですね」

完全に入れ替わったみたい。ぴくぴくしてかわいい。ふふふ。

「ひやん！？ ん、は、はい、私はノノちゃんの奴隸でオプト・ムーンの忠実な構成員です！？」

「それじゃあ次の質問です。藤村さんの仕事は？」

「わ、私の仕事はジュエル・スターズの御船ノノちゃんのメンタルケアと装備のせいびい…

：は表向きの仕事で基地内で”特製のお茶”を流行らせて見えない、ん、ところで同僚を食べて自分と同じいに！？ あ、凄い。みんなをこれで犯したり犯されたりしてえ、仲間を増やすことですう！」

「はい、よくできました。それじゃあ、童貞は貰つてあげますね」

初めての射精を出し切つてぴくぴくしているおしふべチンポをやさしく私の中に迎え入れてあげる。

「あ、あつい、ノノちゃんの感触が！？ は、ひやつん、ん、ああ！！」
「藤村さんがうらやましいです。私は命令でしばらく活動は控えておかないといけないから……」

「あ、あ、あ、あこれ好き。ああ、ノノちゃんのなか気持ちいい！ うん、私頑張ります。早くみんなもズボズボして同じように気持ちよくう！！」

「ん、ふあ、まだまだ大丈夫そうですね。元気に変わつてくれてうれしいです。これからもよろしくね藤村さん」

いつもお世話になつておられたお姉さんの体の上で淫靡に腰を振りながら、いつもの元気な笑顔で私は楽しそうにつぶやきました。

